

令和 7 年11月26日

須賀川市議会議長 佐藤瞭二 様

須賀川市議会 政悠会

代表 本田勝善



視察研修報告書

先に実施した視察研修概要について、下記の通り報告いたします。

記

1, 期日 令和 7 年 11 月 5 日(水)～11 月 6 日(木)

2, 視察研修先 東京

3, 視察内容

(1) 地方議員セミナー

野生動物との共存を目指して～効果的な鳥獣対策とイノシシ対策～

「イノシシの生態と被害対策」

(2) 東京消防庁 池袋防災館

4, 参加者 本田勝善 浜尾一美 斉藤秀幸

5, 概要 行政調査日程及び内容は、別紙添付資料の通り

以上



須賀川市議会 政悠会 行政視察日程

日程 令和 7 年 11 月 5 日 (水)14:00～17:00

場所 東京

としま区民センター 会議室 504 号室

(株)廣瀬行政研究所 地方議員セミナー

野生動物との共存を目指して～効果的な鳥獣対策とイノシシ対策～

「イノシシの生態と被害対策」

講師 小寺祐二 氏 (宇都宮大学 雑草管理教育研究センター准教授)

日程 令和 7 年 11 月 6 日 (木)9:20～11:00

場所 東京

東京消防庁 都民防災教育センター 池袋防災館

「防災体験ツアー」

調査内容 1 日目

日程 令和 7 年 11 月 5 日 (水)14:00～17:00

場所 東京

としま区民センター 会議室 504 号室

(株)廣瀬行政研究所 地方議員セミナー

野生動物との共存を目指して～効果的な鳥獣対策とイノシシ対策～

「イノシシの生態と被害対策」

講師 小寺祐二 氏 (宇都宮大学 雑草管理教育研究センター准教授)



講義内容

- ・ イノシシと人間の日本列島への渡来
- ・ 農耕社会の発展とイノシシ
- ・ 経済システムの変化と鉄砲の普及
- ・ 近代社会におけるイノシシの分布域縮小
- ・ 現代におけるイノシシの分布域の変化と課題
- ・ 質疑応答

日程 令和 7 年 11 月 6 日 (木)9:20~11:00

場所 東京

東京消防庁 都民防災教育センター 池袋防災館 4 階

「防災体験ツアー」

体験内容

- ・ 視聴覚室・防災体験コーナー

(大規模地震が発生した状況をリアルに再現した防災教育動画視聴)

- ・ 救急コーナー

(訓練用人形を使っての心肺蘇生や AED の使い方体験)

- ・ 地震コーナー

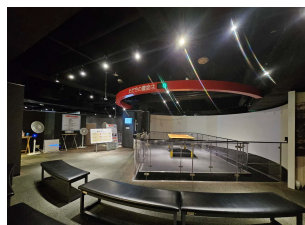
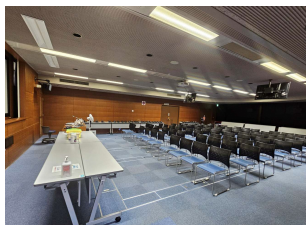
(東日本大震災の地震を再現した揺れを体験)

- ・ 消火コーナー

(初期消火技術を体験。スクリーンに向かって消火器を噴射)

- ・ 煙コーナー

(煙の充満した迷路の中で避難行動を体験)



体験修了のカード



所感

本田勝善

日本のイノシシ管理における当面の課題は農林業被害の軽減だと思われるが現在実施されている対策は成功しているとは思われない。イノシシの捕獲頭数は右肩上がりであるのに対し、農林業被害は減少していない。

イノシシによる農林業被害の対策としては、侵入防止柵設置などの「被害防除」、加害群が人間領域に出没しにくくする「生息地管理」、「個体群管理」がある。これらの対策を適切な配分で進める事が重要である。ただ現状では個体数に主眼をおいた個体群管理が中心で個体数管理を中心とした対策による農林業被害軽減の可能性について、生態学的データに基づいた議論をしていないとのことで、今後、イノシシの生息適地がさらに増加すると考えられ「イノシシの被害対策」については課題が多いと感じた。

浜尾一美

イノシシといえば、一昔前までは、近畿地方や九州地方など西日本を中心に棲息する野生動物だったが、現在のイノシシの分布は、東北、北陸地方にまで広がっている。また、その分布域では、農作物被害や人身事故等が発生しており全国的な問題となっている。

イノシシが好む環境として、広葉樹林や竹林、耕作放棄地などがあるといわれる。特にこの耕作放棄地問題がよりイノシシの増加の要因になっていると考えられる。

また、イノシシはその高い繁殖能力により、高い捕獲圧の下でも衰退が見られない。

このような日本イノシシにおける当面の重要課題は、農林業における被害軽減であり、現在実施されている対策は、捕獲頭数は右肩上がりで推移しているが、農林業被害は減少しておらず、成功しているとはいえない。対策として、電気柵などの侵入防止策の設置による「被害防除」人間領域に出没しにくくする「生息地管理」「個体群管理」があり、これらの対策を適切な配分で進めていくしかない。このイノシシ問題だけではなく、その他の野生生物に対しても同様の取り組みが今必要とされている。これからの里山の管理も重要

となってきた。

齊藤秀幸

日本にイノシシが渡ってきたのは36万年前とされており、人類が渡ってきた6万年前よりはるか昔にイノシシが先住していたとされる。

その種は九州地方に渡来したとされるニホンイノシシと、台湾を経て沖縄地方に渡来したリュウキュウイノシシの2種に分けられる。

そのことから、イノシシの主な生息地は九州沖縄から関東を主としていたが、明治以降に生息域を広め、現在では東北・北陸にまで生息域を広めているとのことである。

渡来直後は狩猟が中心だったのが縄文早期には農耕が広がりを見せたものの、その頃もイノシシの捕獲は続けられており、イノシシは豊穰の神様とされていたそうである。

弥生時代からの環濠集落による農耕社会となってからは、イノシシは害獣とされてきた。

イノシシと人間の対立はさかのぼると太古から続いていることになる。

明治時代以降イノシシの分布域は極一部であったが、太平洋戦争後にその様相が変化し、1960年代の燃料革命による木炭需要の急減などにより全国的に植生が回復しはじめ、1970年には米の自給率が100%に達し減反政策が開始されたことにより耕作放棄地が全国的に増加し、その隣接する里山も管理されなくなったことにより、好適な生息環境が増えたイノシシは、その繁殖力の強さから数を伸ばしていったとされている。

一般的には環境破壊によって生息地を奪われたが故に人間環境に出没しているといった説もあるがまったく逆の理由によるものである。

捕獲頭数も1960年半ばまでは3~4万頭であったのが2010年度には48万頭に到達した。日本のイノシシの平均寿命はメスが20.8歳であるところ純繁殖率は1.20となり、1世代で1.2倍になる計算である。今日の特定鳥獣保護管理計画では生態系保全を含みつつ農業被害の軽減と地域個体群の存続を図ることを骨子としているが、現状は個体数管理を中心とした対策が取られている。

イノシシの捕獲頭数は右肩上がりなのに対し、農業被害額は減少していな

い。その農林業被害の対策としては、侵入防止柵設置などの「被害防除」、加害群が人間領域に出没しにくくする「生息地管理」、「個体群管理」など総合的な対策が必要であるが、これからますます進む少子高齢化による離農によって、管理されない耕作地が増えることは必然的であり、それらをどう管理していくかが課題となる。

これはまた、昨今話題になっているクマ被害についても言えるであろう。

須賀川市でもイノシシその他の鳥獣被害は過去から報告がされていたが、クマの目撃情報についていままで報告されていなかった市東部からも続々と報告がされるようになった。

環境的な問題点として、須賀川市の耕作放棄地は東部の割合が多いことから、今回の研修で学んだ傾向に当てはまると考えられる。その対策についても研修の内容を今後活かしていきたいと考えるところである。